



シンガポールへの輸出牛肉を処理する十勝工場の第2工場

承認を受けた処理施設がないため、十勝管内の牧場は岩手県の屠畜施設まで運び、同国に輸出していた。

第2工場は処理能力が1日当たり150頭に上る。国の強い農業づくり事業を活用し、10月までは衛生環境の改善に向けた改修工事を行っている。申請内容は改修前の施設のため工事終了後に変更届を出し、受理されれば本格的に同国向けの処理を始めることができる。

十勝工場はシンガポール向けの他、建設中の第3工場では北米向け牛肉の処理を計画している。

同公社は「ハサップを導入していて、衛生環境については安心してもらえる施設。岩手まで持ち込んでシンガポールに輸出していた牛を北海道で処理できる」と効果を語る。

ホクレンも「シンガポールに輸出されているのは九州産和牛が多いが、消費者ニーズに合った価格帯の北海道産牛肉を提供しやすくなる」と期待している。

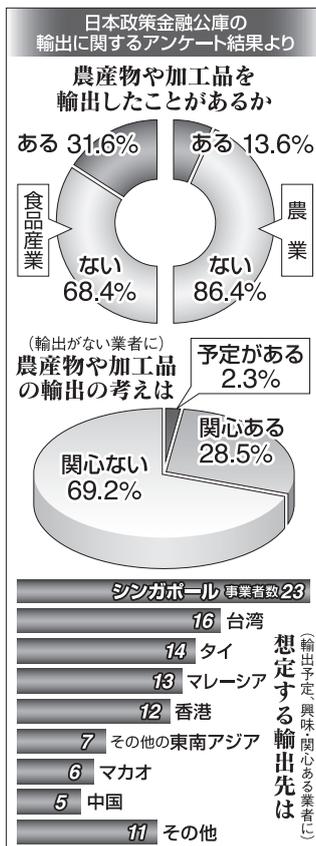
## 農業ガイド1076号

2016年9月24日

### 輸出に「関心」が3割 十勝の生産者・食品業者 日本公庫帯広支店調査

日本政策金融公庫帯広支店（紺野和成支店長）は、十勝管内の農業経営者や食品製造・流通業者を対象に行った輸出に関するアンケートの結果をまとめた。輸出経験のない生産者や業者のうち3割が、輸出には「関心ある」と答えた。関心ある国・地域はシンガポールがトップ。同支店は「チャンスさえあれば販路の拡大先を輸出に求めるニーズが強い」と分析している。

#### 畜産業に高い意欲



輸出経験の有無の質問に対し、「経験あり」は15.9%、うち食品製造・流通業者では31.6%だった。全体の8割以上を占める「経験がない」生産者や業者のうち、今後の輸出について「予定がある」が2.3%、「関心がある」が28.5%と一定数が興味を持っていることが分かった。「関心ある」は業種別で酪農を除く畜産業が36.2%で最も高く、耕種の33.3%が続いた。最も低かったのは酪農の14.6%だった。

輸出予定や関心ある国・地域では、シンガポールが23事業者でトップ。東南アジアの国が上位で続き、アジアが8位まで独占した。輸出経験がある生産者や業者が多

いのもシンガポールが1位。北米、ヨーロッパは各2件だった。同支店は「輸出距離や輸送時間などで欧米や中東よりも、地域市場統合が始まっているASEAN（東南アジア諸国連合）や日本食人気が根強い台湾、香港などの国・地域に集中している」とする。

輸出に向けた課題の質問には、「輸出手続きが煩雑」が23件と最多で、「採算が合わない」（19件）、「物流が非効率・高コスト」（18件）、「海外取引相手の信用力に不安」（同）、「鮮度維持が難しい」（同）の順だった。

#### マニュアル、情報求める

一方で輸出時に求める支援内容は、「輸出に関わるマニュアル整備」「金融支援」「海外勉強会・研修会の情報がほしい」が上位に入った。

このことから同支店は「輸出手続きの規制緩和や手間、コストの削減につながるような物流、輸出インフラの整備が進めば、広い層で十勝産の農作物などの輸出が加速すると考えられる」としている。

輸出の際に最も押し出したい産地名では、「北海道産」を抑えて、「十勝産」が最も多かった。生産者や業者が「十勝産」の地域ブランドに対する意識の高さが表れた。同時に同支店では「輸出促進には海外からの観光客を含めて『十勝』の知名度の一層の向上がカギになる」と指摘する。

紺野支店長は「十勝には、食料基地・世界に冠たる生